

神無月

【かなづき】令和7年10月

古くから日本中の神々が出雲大社（島根県）に集まると信じられていたの
で、出雲以外の神社には神様がいない
なってしまうという意味があります。

発行：北海道神社庁一區教化委員会

我が恐るるところは、

敵にあらずして 我にあり

平野国臣・神武必勝論

今月のことば

我が恐るるところは、
敵にあらずして 我にあり

平野国臣・神武必勝論

敵を破るのは自分である。敵の強さを知る
のはよい。その敵の強さを破るためには、自
分の力が敵以上のものでなければならぬ。

筑前の勤王家平野国臣の武が神武―神の如
き武を目的としたのは、神武こそ不敗である
といふ自信を持ったからである。

力の武は力以上のものでない。神武は神の
持つ威力そのものである。

人間の信仰も、人並みの信仰では、いつか
は破られる。神の信仰をそのまま自分の信仰
とすると、自分は神によつて生かされてゐ
る自信を持ち得る。

結局、我れの信仰を確立すとは、神の信仰
を自分のものにするにある。神の御心を自分
の心にする以外に、我の確立があらうか。

（神道百言 一般財団法人神道文化会編より抜粋）

二十四節気

【寒露 かんろ】… 八日

旧暦九月戌の月の正節で、このころになる
と、五穀の収穫もたけなわで、農家ではこと
のほか繁忙を極めますが、山野には晩秋の色
彩が濃く、朝晩は肌がそぞろ寒気を感じは
じめるようになります。寒露とは、晩秋から
初冬にかけて野草に宿る露のことをさします。
【霜降 そうじょう】… 二十三日

六曜・選日

旧暦九月戌の月の中気で、秋も深まり、早
朝など、ところによっては霜を見るようにな
り、冬の到来が感じられます。

七十二候《10月》

霜 降

初候・霜始降（しもはじめてふる）
北国や山里では霜が降り始めるころ
次候・雲時施（くもときときふる）
はらばらと小雨が降りだすころ
末候・楓葉黄（もみじたきばね）
もみじやつたが色づいてくるころ

寒 露

初候・鴻雁来（こうがんきたる）
雁が北から渡ってくるころ
次候・菊花开（きくのはなひらく）
菊の花が咲き始めるころ
末候・蟋蟀在戸（せせりすいすどにあり）
キリギリスが戸口で鳴くころ

※七十二候とは二十四節気の各節気をさらに3つの候に細分
し、一年を七十二に分けたものをいいます。季節の移ろいを
気象や動植物の成長・行動などに託して表現したものです。

季節のまつり

千歳

十月十五日
七五三祝

七五三の祝は、「七歳までは神の子」
といわれた時代に、三歳の男女児が髪
を伸ばしはじめる「髪置」、五歳の男
児がはじめて袴を着ける「袴着」、七
歳の女児が大人の帯を着けはじめる
「帯解」の儀式に由来します。子供の
心身の成長の節目にあたる縁起の良い
奇数の歳に、氏神様にお参りし、無事
成長したことへの感謝とこれからのご
加護をお願いします。

十一月十五日は「鬼宿日」、つまり
鬼が出歩かず自分の家にいるため一年
で最良の日とされていたことや、霜月
参りで氏神様を山に送り出す日に当た
っていたことから、この日が七五三の
お祝いの日に決められたと言われてい
ますが、北海道では気候の関係から、
一ヶ月早い、十月十五日に行う習慣が
あります。

神嘗

十月十七日
伊勢神宮神嘗祭

天皇陛下が新穀を伊勢の神宮に献る
一年中で最も重要な祭りです。外宮で
は十月十五日の夕と十六日の朝に由貴
大御饌を供進し、十七日は勅使が参向
します。内宮では、十月十六日の夕と
十七日の朝に由貴大御饌を供進し、十
七日は勅使が参向します。
神宮では六月・十二月の月次祭と神
嘗祭の三祭を三節祭と呼び、最も大切
な祭りです。

紅葉狩り

紅葉を鑑賞する習慣は、奈良時代から
始まったといわれ、「万葉集」にも登場
しています。平安時代ごろには貴族の
間で広まり、紅葉を愛でながら宴を開い
ていたようで、その様子は「源氏物語」
にも描かれています。その後、江戸時代
には庶民も楽しむようになり、季節の行
事として定着していきました。

紅葉を鑑賞するのに「紅葉狩り」とい
うのはどうしてでしょうか？
「狩り」とは獣を捕まえるということ
ですが、野鳥や小動物を捕まえる意味に
広がり、さらに果物などをとる意味にも
使われるようになりました。現在でも
「いちじく狩り」「やぶいづり狩り」などと
使われています。やがて「狩り」は花や
草木を探し求める意味にも使われ、「紅
葉狩り」というようになりました。

安産祈願 10月の戌の日

8日（水）

20日（月）

*戌の日以外でも安産祈願のご奉仕をして
おります。神社にお問い合わせください。



祝祭日には国旗を
掲げましょう

かみありづき
神在月とは？

十月は神無月で、出雲は神々が集ま
られるので神在（かみあり）月だとい
う信仰が今もあります。またカンナヅ
キは神を祭る『神の月』だとか、神酒
醸造のための「醸成月（かみなしづ
き）」だという説等は、いづれも篤い
信仰を物語ります。そして刈上祝いに
直結する秋祭りこそは、年間最大の賑
わいを呈します。

早春以来、豊作を祈り続けた農民の
心に満足がもたらされると歓喜の表現
をするのは当然であって、この方法を
日本は古代から「神在月」の祭りをあ
らわして来ました。人々の心は祭りに
結集し、祭りは日本人の心を培うとい
う相関関係が繰り返されてきました。
そのため祭りの繰返しが途切れること
は、最も重大なことが断絶されること
に繋がる恐れがあります。

れんちこうみよう 廉恥功名

心が潔白で恥を知ることを意味し、
功名は手柄を立てて有名になること。



石路（つわぶき）

参考文献
『日本人のしきたり』飯倉晴武（青春出版社）
『くらしと祭り百話』小野迪夫（神社新報社）